

第3回リハビリテーション科専門医会学術集会報告

2008年12月6日と7日、都久志会館（福岡市）で第3回リハビリテーション科専門医会学術集会が行われました。前日の暖かさとは一転、寒波で期間中の2日間は雪の舞う厳しい寒さとなりました。悪天候に関わらず、総参加者数は535名（関連職種他72名含む）と予想をはるかに超える盛会で、両日とも会場は熱気に包まれ、活発な討論が行われました。

1日目、代表世話人である佐伯覚ならびに池田聡両幹事の挨拶でスタートしました。

まず、総会が行われ（議長：緒方敦子先生、副議長：越智文雄先生）、直ちに専門医会幹事（候補者）選出が行なわれ、10名の幹事（候補者）が選出されました。幹事会よりは、システム、リハ医育成アクションプラン策定WGならびにデータマネジメントWGの状況について報告があり、正門由久幹事長がこの2年間の専門医会活動を総括されました。今後の専門医会の在り方や役割などについて会場との意見交換がなされましたが、やや意見が少なかった印象があります。第5回（2010年）の専門医会学術集会の代表世話人には、菊地尚久幹事が選出され、第4回専門医会学術集会の進捗状況については、朝貝芳美代表世話人より説明がありました（会期：2009年10月16日（金）～18日（日）の3日間、会場：長野県諏訪市・下諏訪文化センター）。また、第46回本医学会学術集会時の専門医会企画として、「専門医として、リハビリテーション処方をするべきなのか（学術集会2日目15:30-17:30予定）」を開催、座長・演者を公募することが正門幹事長より説明があり、最後に、辻哲也先生より、富士山を背景にしたパワーポイントで第46回学術集会の案内がありました。

総会の後、シンポジウム「Brain scienceのトピックス」（座長：出江紳一先生）が行なわれました。池田先生（脳血栓片麻痺モデル：機能回復と神経栄養因子）、宮井一郎先生（脳機能イメージング：リハビリテーション臨床への応用）、橋本圭司先生（外傷性脳損傷：認知リハビリテーションの進捗）が、ご自身の研究結果も含めて重要な知見を講演されました。最新の研究結果や動向に触れると共に、今後実地臨床にどう結び付けて行くのか、参加者も含めて活発な討論が行われました。

その後、牧野健一郎先生により「カーボン製下肢装具の臨床応用」（座長：朝貝先生）、小山哲男先生により「脳卒中の機能予後予測と地域連携パス」（座長：菊地先生）と題した教育講演が行われました。

特別企画「リハビリテーション医育成アクションプラン（AP）」が、上月正博担当理事の司会で行なわれました。上月理事の概要説明の後、APワーキンググループのメンバーにより、各部門（専門医会、教育委員会、認定委員会、試験問題作成委員会、広報委員会、地方連絡協議会）より説明があり、会場との討論が実施されました。専門医の質を担保しながらどうやって数を増やすか、認定臨床医の制度とどうリンクさせるか、学生へのアプロ

ーチはどうするのかなど、今後、議論を経て、6月の本医学会学術集会総会で決定される見込みです。

その後、会場隣の福岡ガーデンパレスで意見交換会が開催されました。里宇明元理事長の挨拶のあと、正門幹事長により乾杯の発声が行なわれました。恒例の各新専門医から挨拶があり、最後に上月担当理事より閉会の挨拶があり、1日目が終了しました。二次会・三次会と懇親の場が続いた先生もいらっしやったようです。

2日目は「リハビリテーション科専門医と研究」（座長：安保雅博先生、生駒一憲先生）と題しパネルディスカッションが行われました。和田太先生（研究の企画・立案）、辻先生（研究体制）、宮越浩一先生（データマネージメント・統計処理）、加賀谷斉先生（論文作成のポイント）の4名の先生が講演され、研究の進め方や国際英文誌への投稿のポイントなどについて討論が行われました。次に千坂洋巳先生により「嚥下障害と服薬－嚥下したカプセルが胃に到達するまでの動態を中心に－」（座長：園田茂先生）と題して教育講演が行われ、最後に、次回学術集会の案内を兼ね朝貝先生が閉会のご挨拶をされ、学術集会は終了しました。

午後からは同会場会議室で実技セミナー「高次脳機能評価法の実際」が開催されました。これは専門医会による研修事業で、若手専門医のスキルアップを目指して行なわれています（定員が10名と少なく、受付開始日に定員に達する状況であり、受講できなかった先生方には大変申し訳ありません）。今回は、産業医大と鹿児島大学の高次脳機能研究班（岡崎哲也先生、緒方敦子先生ほか）が共同で企画・運営を行ないました（専門医会活動を通じた連携の新しい形になるかもしれません）。概要の説明のあと、各高次脳評価法をステーションにわけ、参加者がそれぞれのステーションを回る形で実際に評価法を体験していただき実習を終えました。

今回の学術集会は専門医会が名実ともに発展していることを伺わせるものでした。専門医会の活動が起爆剤となり、更なるリハビリテーション医学の発展とよりよいリハビリテーション医療の構築につながることを願っています。



総会風景（1日目）



パネルディスカッション風景（2日目）